

バイロンの *The Deformed Transformed* に おける変容のテーマについて (その一)

良 田 玲 子

George Gordon Byron (1788－1824) の未完成ドラマ *The Deformed Transformed* (1824) は不思議な印象を与える作品である。未完成であるから作者の意図が不明確で安心して鑑賞できないとか、特に詩劇であるので、どのように演出してよいか問題があり読まれる事さえ少ないという以上に、このタイトルが不安感をそそのめるのである^①。

尤も、つい先頃までは ‘political correctness’ と言われるものがあまり問題とされなかった。それ故バイロン自身がこの作品を書くにあたって影響を受けたとされる Le Sage の *Le Diable Boiteux* (1707) や Walter Scott の *The Black Dwarf* (1816) 等に見られるように、身体的特徴を表わす言葉をタイトルのみか作品中に使用しても社会的な影響が少なかった。これらの題を和訳すると、上記二作品は其々、『びつこの悪魔』と『黒衣の矮人』となるが、娯楽的要素が多いためか今でも余り奇異な感じが無い。一方バイロンの作品は『片輪者の変身譚』となる。前二作品のように時代的制約による難解さはさておき、タイトルに於けるこのような用語選択は、バイロンの作品がその内容・用語から見て深刻・ハイブrowなものとは言え、読者の知的体系に納まりが悪い感じは否めない。

しかしそれは一つには和訳の故であろう。英語で読む限り、このタイトルに使われている ‘deformed’ の単語は、英語語彙中のラテン語起源の ‘変形した’ という意味の高踏な選択なのである。ゲルマン語起源なら broken—break を使用する。あるいは具体的には limp, hump 等である。即ち、日本語で言えば ‘びっこ’ や ‘かたわ’ と言った和語でなく、この ‘deformed’ は ‘身体障害者’ と漢字表現すべきタイトルなのである。そうすると、この作品が片輪者を笑いのにした作品ではない事を予感する事ができる。

タイトル中で次に来るのが、‘transform’ であるが、この言葉もラテン起源を持つ。あるいはもっと古くはギリシャ語起源で ‘metamorphose’ と言った。ローマの詩人オウィディウスが *Metamorphoses* (『変身譚』) を著して以来、西欧文学にこのテーマで書かれた作品は多いが、中世から近代に至るまでは ‘変身’ は神とその一族にのみ許された行為で、人間が自らを変え

ようとする事はアイデンティティを‘かえたい’と望むと同じく反倫理的・反社会的行為と見なされてきた。キリスト教の論理の中ではこれはことに顕著であって、例えば死後もその肉体をそのまま埋葬して最後の審判を待つということ等は、彼らが如何に変身を嫌ったかを端的に表わしている。変身は犯罪と紙一重で描かれているのである。

即ち、タイトル中の最後の言葉も問題を感じさせる語なのであるが、このテーマがバイロンの時代の後どのように使用されるようになったかを見れば、前者 *deformed* に比して *transformed* は断然現代に近づく程多用される言葉となり、肯定される概念となったことがわかる。発見の時代と言われた15～16世紀の後、農業革命や産業革命を経過して、“変化”とは科学時代のキーワードとなった。21世紀になり生物の遺伝子にまで人間の手が入るようになり、その恐ろしさで科学に疑義を呈される事が多くなったにしても、その言葉‘変化’はまだ現代的な語彙としての地位を譲らないであろう。即ちこのタイトルは学術的に和訳すれば、『身体障害者の形質転換』となる。重ねて言えば、このバイロンの作品のタイトルの醸し出す怪しい雰囲気は、第一語の持つ現代的禁忌性と、第二語の持つ未来への発展的展望によっていると言えよう。

では、こうしたマイナスのイメージをプラスに変えようとする作品で著者が‘変えたかったもの、変えようとしたもの’は何であったのであろうか。この作品に関するこれまでの研究は作品自体の未完成・短編と言うこともあって極めて少なく、多くは先行作品との影響関係を調べる事で占められている。一致した意見としては、バイロン自身が1824年の初版の序言でも認めているように、ゲーテの『ファウスト第一部』からの影響が挙げられる。しかしながら、バイロンの作を読んだゲーテはエッケルマンに向かって‘メフィストテレス’は私の作品から取られたものであろうが、その他はバイロンの全くのオリジナルだ」と叫んだと言う。自分の模倣者を多くの芸術家は嫌悪する筈であるが、ゲーテはバイロンの死後に書き上げて出版した『ファウスト第二部』でバイロンをモデルにしてファウストとギリシャのヘレンの間の夭折する子供を哀惜の念を持って創造している。これはゲーテが如何に深くバイロンのオリジナリティに感動したかを物語るものであろう^③。そこでこの論文ではまずゲーテ言うところのバイロンのオリジナリティを探り、*The Deformed Transformed* を西欧文芸の伝統におけるファウストの変身譚—魂と知性の交換、神に対する人間の反抗譚—ではないものと規定する。次に、このタイトル中にある *deformed* の言葉からバイロンが連想するイメージとしてリチャード三世が多かったこと、あるいは他者から当てはめられるイメージがリチャード三世とかぶっていたところから、この作品がシェイクスピアの *Richard III* を前提とした哲学的風刺作品を書こうとしたとする仮説を立てる。1814年2月7日のマレイ宛ての書簡でバイロンは以下のように記している^④。

…the M[orning] P[ost] in particular has found out that I am a sort of R[ichard]
 d 3d.— deformed in mind and body—the last piece of information is not very
 new to a man who passed five years at a public school… (Underlines mine)

即ち、バイロンの中では‘deformed’は‘Richard III’を呼び出す呪文のようなものであり、その反対もしかりだった。そして、慣れたとは言えその二語の間の絆を断ち切ろうと‘transform’を計ったのである。言い換えれば、バイロンが‘変えたかったもの、変えようとしたもの’は伝説化したりチャード三世のイメージであり、それを普及させた立役者がシェイクスピアであるとしたバイロンはシェイクスピアのリチャード三世の人間像の形成に関して an official objection (異義申し立て) を行おうとしたのではないかと、以下に検証する。ここで作品自体の内容分析の前に問題になるのは、一つにはバイロンがそのように評価の定まった大作にたいして物申すと言うような可能性があったかであり、もう一つにはバイロンは世界文学の巨匠であり増してや英文学の最大の星とも言うべきシェイクスピアをどう評価していたのかである。(以後は *The Deformed Transformed* を *D. T.* と表記する。)

始めに、バイロンは伝説的リチャード三世像を疑うような可能性があったかを検討する。まず‘deformity’の言葉に留意するならば、英文学史上では真っ先にシェイクスピアの *Richard III* が挙げられるが、バイロン個人に言及すれば彼自身の足が不自由であった。バイロンはその作品中では直接に自らの障害を嘆くような作品は残していず、個人的な文章でも余り多くを語っていない。しかしながらバイロンの終生の友人の一人ムーア (Thomas Moore) はバイロンが少年時代にヒステリーの発作を起した自分の母親から‘a lame brat’と罵しられた嫌な思^⑤い出を語ったのを記憶しており、これがこの作品の執筆動機でありテーマであろうとしている。一方で、同じくバイロンとの友情を1822年以来温めたブレシントン侯爵夫人もこれを支持するより詳細な記録を残しているが、研究者の間ではやや内容に議論の余地有り^⑥とされている。とは言え、これらの資料から G. Wilson Knight はバイロンに肉体的健常人に対する劣等感を設定して、これを‘リチャード三世コンプレックス’と呼んだ。*D. T.* の前半はこの劣等感の悲しい現れであり、変身願望がかなえられ異性の愛を獲得する自己実現の物語であると読み解いた。また、このリチャード三世へのこだわりはバイロンの最高傑作といわれる *Don Juan* (1818-1823) の中にも、ノーマン・アベイに出没する超自然的存在の効果を倍増する基層イメージのリチャード三世として描かれている^⑦。そして、メイン・キャラクターのアーノルドが変身するにあたって、巨人族の身の丈ではなく標準サイズを選んだことは、バイロンの敬愛した詩人、A. ホープやリチャード三世、ナポレオン一世への思い至りがあるのではな

⑧
いかと指摘する。

しかしこれに対して Charles Robinson は、リチャード三世の ‘deformity’ への思い入れで書かれたとすると、第一幕二場と第二幕一全体のほぼ二分の一を占める部分一で変身後のアーノルドが愛を探すよりも、あるいはその愛を求める所を平和な生活の中にではなく、‘ローマの掠奪’ と呼ばれる1527年のブルボン軍参加にする筋が読み解けないとした。ロビンソンは ‘*The Devil as Doppelgänger in The Deformed Transformed*’ として説を展開した。Knight への反論は暫し置いて、もう一人の自分の発見として自らを捉える事は、この論文の論旨の展開に当たって後に重要になるので明記しておきたい。

さて、先の二点の他にバイロンと身体不自由に関する資料がある。バイロン自身が友人の Henry Fox に書き送った1823年4月2日の書簡によると、同じ身体不自由を持って生まれていても、一方はその躓くようなよろめくような歩き方が天使が躊躇っているような愛らしい存在にもなれば、バイロン自身のように ‘*Le Diable Boiteux*’ もいると似て非なるものの存在をバイロンは主張している。^⑨

But there is this difference, that *he* appears a halting angel, who has tripped against a star; whilst I am *Le Diable Boiteux*,—a soubriquet, which I marvel^⑩ that, amongst their various *nominis umbrae*, the Orthodox have not hit upon.

もし、この辺りからバイロンが *D. T.* を着想したとしたら、それは単なる Doppelgänger 伝説中のもう一人の ‘私’ ではなく、後世のジキルとハイドに近いものではないだろうか。そして、せむしの樵が勇敢な戦士と変ったとしたら、前者はジキルで、ハイドになるような悪役はシェイクスピアのリチャード三世とすることになる。しかし、後に詳説するが、*D. T.* は大人しい男が傍迷惑な男に変わると言う単純な変身譚ではない。アーノルドは外観が変わってもその内容—性格とか感受性とか願望とかは変化しないのである。言い換えれば、外見とその内側に持っているものや行動様式は相関関係にある付随物ではない。となれば、シェイクスピアのリチャード三世はその反対の例—外見と内観の一致の格好な例である。即ちバイロンの意図はここにあると言えよう。外観と内観を一致したものとして、外観の悪い者を皆であざ笑うシェイクスピアの人物造形方式はバイロンにとって面白いものではなかった。パブリック・スクールでは嘲笑の対象とされ、親にまで侮蔑された子供が誇り高く知的であった場合には、その批判の目は同輩や親族に向く以上に、当時の知識体系を形作る伝統的な価値観にいく筈である。びっこを笑う風潮の源は現世的価値観に劣らず、それが模倣する芸術の価値観の中にあるとバイロンは看破したのであろう。

では、そのような可能性が時代的考証によって検証されるであろうかが次の問題となる。その為にシェイクスピアから離れて、リチャード三世像の歴史の変遷を概観するが、その前にまず日本においてのリチャード三世研究受容史を概観してみたい。1977年に英国 armchair-detective-story^⑪の古典の一つジョセフィン・テイの『時の娘』^⑫が翻訳されて日本の推理小説愛読者は歴史内容の恣意性に驚いた。それでも一般的にはシェイクスピアの創造したリチャード三世のイメージが強いまま今に至っていたが、アカデミックの分野で先頃20世紀末にまとまった研究書が出始めた^⑬。次に本国英国に目を移すとこの歴史は長い。17世紀スチュアート朝が絶えると同時に、16世紀中にトマス・モア（Thomas More）などの賢人・歴史家・シェイクスピア等市井の文人を含めて挙げて形作った残虐な怪物であり王位篡奪者としてのリチャード三世像が崩れ始めた。そうしたリチャード三世擁護論の一方では伝説擁護論も健闘するが、20世紀に至って1924年リチャード三世を称える同好会 White Boar が発足し、1956年リチャード三世協会に発展した。英国に歴代国王数ある中で、この協会のみが国王のために存在するものである。

さて、それでは1788年から1824年のバイロンの人生に重なる時期を中心にリチャード三世論争を具体的に検討しよう。出版事情は現在とは異なっているから、ある種のものとは当時でも簡単に読めたが、ある種ものは入手が困難であったろうと思われる。しかしここでは一応17世紀からの文献にも目を通すこととする。1614年に Walter Raleigh がその *The History of the World* でリチャード三世のイメージを明るくしないまでも、王位篡奪者としての非難をやめ、その矛先をヘンリー七世八世に向けチューダー英雄論打破の先駆者と言われた。1616年には William Cornwallis による *The Encomium of Richard III*（『リチャード三世賞讃』）が出たが、まだインパクトは弱かった。

それに続いた1619年のジョージ・バック（George Buck）の『国王リチャード三世の歴史』^⑭は大部の作品で、リチャード三世のイメージの伝説反対を主張した最初の歴史家であり、賞讃に偏ることなく均衡の取れた論争を展開した。バイロンは1816年10月5日に、Mary Shelley が *Frankenstein* の着想を得たとされるスイスのディオグッティ荘から、親友であり彼の出版者ジョン・マレイに宛て “Save me a copy of ‘Bucks Richard 3d.’ republished by Longman.” と書き送っている^⑮。バイロンがシェリー、メアリー・シェリー、John Polidori と幽霊話を書こうとした時期と場所から類推するに、バイロンは、メアリーのモンスター人造人間に対して自らは外観の悪しき者としてリチャード三世の着想を得た。実際に書いたものは断片として残る Vampire story であるが、少なくともバイロンはリチャード三世を題材にするにあたって、史実を確かめようとした事がここで確認できる。かつ、この1816年に既に D. T. の着想を得たらしいことは、D. T. の序文でバイロンが名を挙げているゲーテの『ファウスト』を

口頭訳で聞いた記録が残っていることと付き合わせると推量し得る。^⑰『ファウスト』に感動したバイロンは原本をロンドンのマレイ宛てに注文するがなかなか手に入らず、1822年—D. T. の執筆が開始された年である—にはシェリーの訳がバイロンを取り巻くピサ・サークルで熱狂して迎えられている。^⑱即ち、『ファウスト』とバックの『リチャード三世』とは時を同じくしてバイロンの心に入り込み、一つの作品を生み出そうとしていたのである。

事実これを裏づける記録が別にも残っている。このバックの本は直ぐには手に入らなかったらしい。1819年5月25日ヴェニスから再びマレイに ‘I want a Bulldog—a terrier—and two Newfoundland dogs—and I want a life of Richard 3d. advertised by Longman long long long ago’^⑲ とバックの本を催促している。ここから読み取れる事はバイロンはこの本を手でできなかったにもかかわらず、2年半以上経ってもその書物にこだわっていたという事である。これらの書簡をウイルソン・ナイトも前述の書物中に引用しているが、単に ‘こだわり’ としていて、その内容を吟味していない。この *History of the Life and Reign of Richard the Third*. (1649) はロングマンの後も再版され、最近ではメイヤーとキンケイドが1973、1979と続々編纂・刊行している。^⑳しかしナイトの論文は1966年に出版されているので、恐らくバックの内容は知らないまま、バイロンの書簡からのみバイロンのこだわりを読んで劣等感として規定したのではないだろうか。

では、そのこだわりが何処からきたかという点、同じようにバイロンの書簡集から読むことができるが、この書簡はナイトが活用したバイロンの *Letters and Journals* には収録されていない。その後発刊される *Byron's Letters and Journals* に至って始めて収録されるものであるが、それによってバイロンのリチャード三世に対する姿勢を推量しうる。その作品は18世紀になってから出版されたウォルポールのものなので、その前に17世紀の伝説擁護論について言及しておこう。1621年 Francis Bacon は *History of Reign of King Henry the Seventh* (『ヘンリー七世治世史』) を著しジェームス一世に献呈して、伝説擁護論者の代表となった。この時代はいまだスチュアート王朝の影響を否定しきる事の出来ない時代ではあった。しかし、次世紀にはいと遠慮はなくなり、賞讃論者ホラス・ウォルポールと伝説擁護論者デヴィッド・ヒュームを双方の雄として活発な議論が為された。

ホラス・ウォルポールは『リチャード三世の生涯と治世に関する歴史的疑問』^㉑を1768年にバックの書の影響下にものし、リチャード三世再評価、伝説修正・反対論の土台を築いた。ウォルポールは自身政治家であったばかりでなく、首相ロバート・ウォルポールの末子でもあったために彼の作品は世に知れ渡るところとなりチューダー朝伝説修正・見直し論の決定打となったが、一方で、記録の誤読があり、伝説擁護論者を活気づかせ、ますます論争を盛んにする事となった。このウォルポールの書物にバイロンは1814年2月9日のリー・ハント宛の書簡で以

下のように言及している。²²

The M(orning) P(ost) has one copy of devices upon my deformity—which certainly will admit of no “historic doubt”²³ like “Dicken my Master’s”²⁴—another upon my Atheism which is not quite so clear—and another very downrightly says I am the *Devil* (boiteux²⁵ they might have added) and a rebel and what not—possibly my accuser of Diabolism may be Rosa Matilda & if so it would not be difficult to convince her that I am a mere Man. (Underlines mine)

ここから見ると、バイロンは自身の ‘deformity’ は疑いようのない事実であるが、リチャード三世に関しては疑いがあるとしてウォルポールのタイトルを引用している。この一群の文章にはリチャード三世に関する語彙が豊かに使用されており、バイロンは少年時代からシェイクスピアに親しんでいて、リチャード三世に充分通じていることが窺われるが、それだけでなく、その3日後の1814年2月12日の Lady Holland 宛てとみられる書簡²⁶では、“Do you mean by asking me if I intend to see Kean—that I may go to your box?—I do wish to see him (particularly in Richard) very much.”²⁷ と書いて、観劇の前では彼の関心はキーンに対するよりも、リチャード三世に対する方が高いことを示している。次にバイロンは2月19日の日誌に、当時その名の高かった俳優キーンのリチャード三世劇を鑑賞したことを記録している。²⁸

Just retuned from seeing Kean in Richard. By Jove, he is a soul! Life—nature—truth—without exaggeration or diminution. Kemble’s Hamlet is perfect;—but Hamlet is not a Nature. Richard is a man; and Kean is Richard. Now to my own concerns.

翌日バイロンはホランド・ハウスでキーンに会い、その後は食事を共にしたり、高価な短剣を贈ったりしてその賞賛の意を表わしている。即ち、バイロンはバックのリチャード論を読みたいと思う前に、ウォルポールのものを読んだか、内容を知っており、その結果、以前より彼の書簡集の中に頻々と現れるリチャードの幻影を自分の ‘deformity’ と一致させて楽しみながら、一方で周囲の抱くりチャード三世の決定論的印象には疑わざるべからざるべきところありとしていたのである。バイロンがどのくらいシェイクスピアの作品に通じていたか、愛好していたかは後述するが、ことリチャード三世に関するかぎり、幾ばくかの異義を感じていたとは言い得る。まさにナイトの言うところの “Byron’s ‘Richard complex’ was finally expanded into

his unfinished drama *The Deformed Transformed*……”^{②⑨} である。

しかし、話を19世紀初頭に掛けてバイロンの人生に重なる時期のリチャード三世論争に戻そう。バイロンがウォルポールを読み、バックの本を手に入れたいと考えていた19世紀の初めは、この論争が活発化する時期でもあった。必ずしも鋭敏な頭脳の持ち主でなくとも‘背むし’のリチャードのイメージは妥当かどうかを問うてみる可能性が一般化する事になった。バイロンは1824年に没するので、その前後の論者に大物がいる。ウォルター・スコットである。

冒頭で *The Black Dwarf* の著者として挙げたウォルター・スコットはロマン主義小説家で、自身も足が不自由であったが、*Rob Roy* (1818) でチューダー朝伝説への懐疑論を唱え始め、以後他のロマン派に影響を与えた。『ロブ・ロイ』は1715年のジャコバイト叛乱後の北イングランドを舞台にしているが、その中ではっきりとリチャード三世のイメージ偏向はウィリアム・シェイクスピアによるものだとしている^{③①}。事実はシェイクスピア自身にも、バイロンが奇しくも語ったようにその先達がいたわけだが、それについてはシェイクスピアの項で述べるとして、ここではどんな歴史書よりも一般人に近い所にある文芸や芝居の力を熟知していた小説家の眼識を見ることが出来よう。

バルワー＝リットンと同じくロマン主義小説家であるが、その発表は1843年の *The Last of the Barons*^{③②} とバイロンの没後となったとしても、後にバイロン家とリットン家は婚姻を結び、バイロンの血はリットン家に流れることになるので疎かに出来ない。この中で、バルワー＝リットンは彼の批判するスコットほどではないが、ばら戦争当時の英国貴族間の戦いを出来るだけ公平な目を以て描こうとした。この他にジョージ・ジェームズの *The Woodman; A Romance of the Times of Richard III* (『きこり：リチャード三世のロマンス』)^{③③} があり、これは題名からするとまさに *D. T.* の別伝のようである。また、Robert L. Stevenson の *The Black Arrow* (1888) (『黒い矢印』) がある。日本におけるリチャード三世史研究の泰斗、尾野比左夫によると彼らはリチャード三世については、チューダー朝伝説と19世紀の伝説擁護論者の見解を受け入れたが、ヘンリー七世をも批判する。リットンとジェームズはチューダー派ではなくランカスター派であり、スティヴンソンはヨーク派に同情的だが、リチャード三世には反感を持っていた。しかし、三者とも、チューダー朝伝説ほどリチャード三世に対して極端な取扱い^{③④} はしていないとのことである。バイロンがスコットの『ロブ・ロイ』を読んだことは1821年2月5日の日記に“the kiln's in a low”とあり、これがchapter 20から‘The kiln's on fire—she's a' in a lowe’の引用であるのでわかる。

同じく尾野によると、歴史家としての伝説懐疑論者にはSharon Turnerがいる。彼は1823年 *The History of England during the Middle Ages* を刊行した。また、19世紀で唯一の伝

説擁護論を唱えた歴史家は John Lingard で、1819年 *The History of England* 全三巻を表わし、歴代九人の国王をリチャード三世を含めて扱った。19世紀は その他にもその中間の立場をとる文学者、歴史家を多く輩出した。

このように、19世紀に入るとリチャード三世論争は活発化するが、その理由はこれまでの権威に抗うというロマン派の反骨精神のみならず、恐らく科学的歴史の方法が発見されて‘史実’と言う概念が形成されたからではないかと思われる。科学的精神そのものを信じる事が実はそもそも勇気のいることで、ロマン派あってこそその科学ともいえるのであるが、船と鉄道が世界の各地を結び世界標準時が設定されると、歴史もまた客観性を要求されざるを得ない。そして、こうした時代に生を受け、リチャード三世と似た障害を持ったとされるバイロンが、障害のほかは恵まれた青年であったとしても、200年間続いた偏見に対処しようとした事、あるいは少なくとも劣等感として忘れ去ったり逃れたりするのでなく、そのような偏見を押し付けてくる輩に対して対抗姿勢よりも、冷笑したり風刺によって笑おうとしたりする事を試みようとしたのではないか。実はバイロンの足は水泳や乗馬が得意であったことからしても重篤なものでは無くいわゆる蝦足であるが、障害と言うものは持った本人にしか理解できない重大さを担わされることがよくある。ことにその障害を肉親に罵られたりすると深刻化する。それは先に述べたようにバイロンにとってそうであったし、*D. T.* のアーノルドにあって然りだった。ナイトの論文を読むとバイロンのリチャード三世コンプレックスは劣等感と訳さざるを得ないほど物静かなもので戦闘の場面とそぐわないとのロビンソンの批判を得たが、こうして見るとナイトの説は半分正しいと言えよう。ただ、バックの論点などをきちんと参照していないのでバイロンがただリチャード三世を言わば劣等感で繋がって愛していると見てしまった。だが、バイロンはもっと広くその伝説を捕らえようとしていたのだろう。歴史への懐疑の目は同時期に執筆された *Don Juan* などを始めとしてその他のバイロンの作品にも多く見受けられる。如何に大物のシェイクスピアとは言え、こうした風潮の中にあって、バイロンは大様に笑って見せることが出来たのではないかというのが、第一の問題点に対する答えである。

では、次には第二点としての、バイロンのシェイクスピア観を見ていくに当たって、まずこれらの論争までに、16世紀のリチャード三世像は如何にして何故作られたかに視点を当てよう。1564年に生を享け1616年に没したシェイクスピアは1592～3年の間に史劇『リチャード三世』を書いたとされる。時はチューダー朝最後の王エリザベス女王の時代であった。チューダー朝とはエリザベスの祖父ヘンリー七世がボズワースの戦いでリチャード三世を破って打ち立てた王朝で、残忍な王位篡奪者を除いてバラ戦争を終結させ英国に平和をもたらしたとされている。しかし、それが史実に近いのかどうかはこれまでに見たとおり疑問が持たれて来た。ただシェ

イクスピアの当時はそのチューダー朝英雄論に異義を申し立てるものはいなかった。そのチューダー朝を正当と見なす論議は元々1485年にヘンリー七世が王位についた時に王自身の命令によって始まった事であったからである。チューダー朝は長子相続制の原則に照らすと、正統な王位継承権を持っているとは言い難かったので、彼はその正統性を主張できるような年代記を欲した。その為には、それまでのバラ戦争の時代を社会不安の時期として喧伝し、チューダー朝を平和の時代とする事、ついでそれまでのプランタジネット朝のリチャード三世こそが王位篡奪者であると主張する必要があった。代表的な著作はPolydore VergilとSir Thomas Moreのものである。前者は1508年に命を受けて *Anglican History* を1533年に完成した。この中で始めてリチャード三世の身体不具伝説ができる。Sir Thomas Moreは1513~17年(諸説あり)に *The History of King Richard the Third* をグラフトンの年代記の追加散文として発表するが、これは歴史でも伝記でもなく文学作品である^③。この中でリチャードは誕生以前からの悪人とされ、身体の欠陥を強調された。

下ってヘンリー八世の時代にはEdward Hallが1542年に盲目的チューダー朝支持、忠実なプロテスタンティズム、チューダー朝の宣伝・賛美の年代記 *The Vnion of the Two Noble and Illustre Families of Lancastre and York* (『ランカスター・ヨークの二大有力貴族家の統合』)としてチューダー伝説をまとめた。またエリザベス朝になって1577~78年、チェシャーのジェントリ、Raphael Holinshedも *Chronicles of England, Scotland and Ireland* (『イングランド・スコットランド・アイルランド年代記』)を出版し、リッチモンド伯ヘンリー・チューダー待望論を展開した。これ等の文献を用いてシェイクスピアは『リチャード三世』を書き、上演して、悪意に満ちた身体不自由のリチャード三世像を市民に至るまでに行き渡らせた。文学になった人間像は中々打ち破れず、後にバイロン自身がメドウィンに“Shakespeare after all may have been heavily indebted to authors whose plays are lost”^④と言って、彼にしても先達に学ばなければ大した事は出来なかったとこぼすまでになっている^⑤。

そのシェイクスピアの生きた時代も、バラ戦争後の平和な時代に通じるものがあった。旧教と新教の争いはエリザベスの戴冠と共に危うい均衡を得て、人々はその平和と国家の繁栄を寿ぐ事には反対しなかった。そのため、シェイクスピアがその史劇を書くにあたって、一群のチューダー伝説を活用するにも支障はなかった。即ち、『リチャード三世』はプロパガンダ劇と言え、時の政府の意向をうけて、特別の思想を伝達する為に作られたものである^⑥。

ただ、ここで断っておかなくてはならないが、シェイクスピアはプロパガンダ劇ばかりを書いたということではない。彼の戯曲は通常は悲劇、喜劇、史劇 (history plays) の三種類に分類される。例え歴史を扱っても、『ジュリアス・シーザー』や『アントニーとクレオパトラ』は悲劇であり、史劇とは特殊な用語でエリザベス朝の演劇、特にシェイクスピア劇にのみ用い

られる概念である。歴史劇 (historical plays) との差は、史劇は英国史、ことにチューダー朝にまつわる歴史を扱ったものである。プロパガンダ劇はこのジャンルに見られる。とはいえ、バイロンにしてみればシェイクスピアが他のジャンルの作品で偉大であればあるほど、プロパガンダ作品での虚構の許し難さがシェイクスピアに対する反発を促進した可能性がある。

このような史劇の書かれた順番を見てみると、内容として扱われている事件の発生年代順にはかかれていない。まずは『ヘンリー六世』(第二、三、一部の順)で、彼がいかにフランス内の英国領を失ったかが描かれ、ランカスター朝の君主は正統の継承権を持っていたが、頼むに足らなかった事を示す。ついで書かれたのは『リチャード三世』である。ここではヨーク朝も醜く残忍で、ランカスター家から王位を篡奪したものだと言っている。ここまではシェイクスピアの前期史劇と分類され、この後の五作は後期史劇と呼ばれる。

この後期史劇にはまず『リチャード二世』、次に別の僭主が語られる『ジョン王』がある。次の『ヘンリー四世』I & IIはハル王子とフォルスタッフで有名で、酒飲みの愉快的友人と遊び暮らした王子も、いざ国王としての義務に目覚めると古い人間関係を排しても国の為に一身を捧げなければならないという王者の変身譚を描く。それに『ヘンリー五世』と続き、其々の王が如何にしてその後裔から王となる資格を奪ったかが語られる。この発想は『マクベス』の中で展開される子孫における繁栄の約束である。以上のどの王をとっても、英国民が王として安心して戴けなかったことを巧みに描出する。最後は『ヘンリー八世』で締めくくられるのは当然の事であるが、この戯曲では後にヘンリー八世を有名にする、后を次々に替えて大陸からの影響からも国内貴族の勢力均衡からも超絶して王朝を維持しようとする深刻で滑稽なほどの努力は描かれず、繁栄するエリザベス朝英国の象徴としての英邁な国王が描かれてシェイクスピアの史劇シリーズは終わる。面白いのは、『ヘンリー七世』と言う芝居がない事である。ヘンリー七世は『リチャード三世』中の善玉として充分に描かれているので、それ以上は当に「言わぬが花」であったと言うことか。『ヘンリー八世』は1612~13年の間に書かれたとされ、1634年に始めて発行された『血縁の二公子』³⁸を除けば1616年までのシェイクスピアの生涯最後の作品である。

ここでまとめると、シェイクスピアは確かに偉大な作家であり、時代的要請に見事に応えて、スペイン無敵艦隊を破りアメリカ大陸に進出を続ける女王陛下の軍隊を送り出す国民の血を沸き立たせた。しかしそのような部分はプロパガンダ作家としての虚構をも含んでいた。そこを、その枠から外れた眼差しに掬い取られると言うことはありそうなことである。

では、次にはバイロンにとってのシェイクスピアを検討する。バイロンは子供の頃からシェイクスピアに親しんだようで、二十歳になると引用するに最早書物を手にとる必要がないまで

になり、反対に傍から彼の書いたものにシェイクスピアとの近親性を見て非難され、バイロンは上に引用したような科白—上述のメドウインへの言葉—を返すまでになった。そして、手にとっての模倣ではなく、人間の表現として当然似て来た結果だとしている。事実友人のリー・ハントによると、1822年のピサとアルバロでのバイロンの蔵書にはシェイクスピアもミルトンも無いとバイロン自身が主張したと言うことである。³⁹ここでは、バイロンの plagiarism の有無・是非を問うのではなく、バイロンが其れほどまでにシェイクスピアに通暁していた事を確認したい。

ついで、そのシェイクスピアの作品のうち、何をバイロンが好んだか、引用したかをバイロンの書簡と日誌集から見る。⁴⁰インデックスの頻出度を見ると以下の如くである；第一位 *Macbeth*、第二位 *Hamlet*、第三位 *Henry IV*、第四位 *Othello*、第五位 *Richard III*、第六位 *Merchant of Venice* である。勿論これは新しい資料が発見されて大きく変わる可能性無しとはしないが、バイロンの好みを知るよすがにはなる。実は六位まではその他の作品を大きく引き離してよく引用される作品であるが、第七位 *Coriolanus* (『コリオレイス』) からはその頻度が半減する。これから見ると、バイロンは喜劇よりも悲劇を、其れも史劇かそれに順ずる劇、戦士あるいは武人の物語を好んだようである。三位の *Henry IV* は、ファルススタッフの魅力かハル王子の変身かどちらがバイロンを惹き付けたのかは今のところ定かではないが、変身を理解できる人間と、変らぬ人間との好一対である事は確かである。そしてマクベスとリチャード三世とは双方王位篡奪者と呼ばれた。ここで確認できる事はバイロンが好んだものが恋愛物ではないということでもある。

また、リチャード三世関係の引用・出典の中で最も多いのが ‘Not in the vein’⁴¹ で、バイロンはどうやら口癖のように言いもし、書いてもいたようである。「そんな気分ではない」とはいかにもロマン派の詩人が好みそうな科白である。

以上のように、バイロンは自らの作品自体までシェイクスピアの換骨奪胎だといわれることもあった。⁴²流行児になった彼への妬みからきたものであったとしても、これが彼を悩ませた事は事実でこれに彼は何等かの対処を計らねばならなかった。また、前段で述べたようにシェイクスピアの作品はバイロンが若い頃からの愛読書ではあったが、神経を逆なでするような表現や用語があって、如何にエリザベス朝の饒舌と言っても受け入れがたいものが、バイロンにはあったと考えてよいだろう。

このような状況の下で、バイロンに可能なことは、一つにはシェイクスピアが多くのイギリス人が信じているように欠点のない永遠の巨匠ではないと主張することで、もう一つには、その結果として自分の作品と創作の姿勢に自由を与えることである。

1812年9月28日ホランド卿への手紙がある。当時舞台に本物の馬を運び込む等、大掛かりな

舞台装置が流行っていた。そうした風潮について意見を述べているが、その後で次のように続ける。“If I part with the possibility of a future conflagration we lessen the compliment to Shakespeare^⑬”

また、2月にキーンのリチャード三世を見たあれほどの感激の後で、1814年3月24日に James Hogg に宛てた書簡では‘オリジナリティ’について述べている。少し長いがバイロンの姿勢がよく分かるので全文を引用する。^⑭

Shakespeare's name, you may depend on it, stands absurdly too high and will go down. He had no invention as to stories, none whatever. He took all his plot from old novels, and threw their stories into a dramatic shapes, at as little expense of thought as you or I could turn his play back again into prose tales. That he threw over whatever he did write some flashes of genius, nobody can deny: but this was all. Suppose any one to have the dramatic handling for the first time of such ready-made stories as Lear, Macbeth, &c. and he would be a sad fellow, indeed, if he did not make something very grand of them. (As) for his historical plays, properly historical, I mean, they were mere redressings of former plays on the same subjects, and in twenty cases out of twenty-one, the finest, the very finest things, are taken all but verbatim out of the old affaires. You think, no doubt, that A horse, a horse, my kingdom for a horse! is Shakespeare's. Not a syllable of it. You will find it all in old nameless dramatist. Could not one take up Tom Jones and improve it, without being a greater genius than Fielding? I, for my part, think Shakespeare's plays might be improved, and the public seem, and have seemed for to think so too, for not one of his is or even has been acted as he wrote it; and what the pit applauded three hundred years past, is five times out of ten not Shakespeare's, but Cibber's.

(Underlines mine)

(この中でバイロンは現代文芸批評用語のように history play と historical play を区別していない。)

バイロン当時のシェイクスピア劇は Cibber 版によって上演されていたものだが、バイロンは‘演出’や‘version’の概念を理解していた。そして自分も又そうした時の流れの中で現実や虚構を取り合わせて新しい作品を編み出す束の間の存在であると考えていたようである。そして、バイロンにとってはキーンのリチャードが最も魅力的であつたらしい。同じ年の4月30日

バイロンは晩餐の招待の断りに、“…and excuse myself out of Tuesday’s dinner because I want to see Kean in Richard”⁴⁵ と再びキーンのリチャード三世を見ると言っている。その翌日のレデイ・メルボーンへの手紙には、“—tuesday—I go to Kean &…”⁴⁶ と一旦の観劇の後には以前と異なり ‘キーンを見に行くのだ’ と書き送っている。版權収入を受け取ろうとしなかったバイロンにとっては著作権とはそのようなものであったのだろう。ぬきんでた天才は居ず、芸術作品も時空を越えた人間の共同作業の結果だと考えるとすれば、バイロンはまさにロマン派の詩人であった。

そうしたシェイクスピアに対してバイロンがとった態度をアン・バートンによって検討してみよう。バイロンは晩年に、その大巨匠に対して愛情と留保の間の曖昧な態度をとったという事である。

The Bowles controversy, during which Byron, in 1821, defended the worth of Alexander Pope against readers now elevating Shakespeare far above him and the other Augustans, added fuel to the fire. So, in Italian exile, did his gathering impatience with English insularity and pride, the tendency of his fellow-countrymen to run down foreign authors in favour of their own.

Over and over, those who encountered Byron after he left England in 1816 — Shelley, Mary Shelley, Thomas Moor, Lady Blessington, Medwin… — report quite independently how often, in conversation, he denigrated Shakespeare.⁴⁷

当時大陸でのシェイクスピアへの批判は主にシェイクスピアの戯曲がフランス古典劇の三単一の法則から外れている事に由来していたが、バイロンは性格造型に関心を持っていた。“Hamlet, as a whole is original; but I do not admire him to the extent of common opinion.”⁴⁸ と言って、シェイクスピアはぬきんでた天才ではあるが、バイロン自身が深刻に取る何者かではないとバートンは論じている。⁴⁹

前項でナイトはバイロンが *D. T.* でアーノルドに人並のサイズを選ばせたのは、バイロン自身がその身体的障害の為にポープやナポレオンに近親感を持つてのことはないかとしていることを引用したが、ここでもバイロンはシェイクスピアに対抗させて身体障害者とも言うべき背むしのポープを顕彰しているのである。外形だけで詩人の好みを云々するようでは、当にシェイクスピア的リチャード三世の読みであってこれを非難することはできなくなるが、差別された側と考えれば、近親感を禁ずる事は難しい。

バートンはこの論文の結論を *Don Juan* を使って、“この詩は未完成で終わっているので、読者は彼がどちらを最終的に選ぶのかを永遠に知らされない。多分、しかしながら、アリストファネス的ではないが多分にバイロンの答えは—（ポープとシェイクスピア）双方をとるものであろう”^⑩ としている。

このように、多くの他の詩人文士達と同じくバイロンもまたシェイクスピアの影響からは免れ得なかった。だが、彼は何とかその巨匠から離れて自由に考えようとした。その努力をただシェイクスピアが偉大だというだけで無きが如くに無視してはなるまい。前段で見るように、その視点はバイロンのみならず処々で声をあげていたのである。バイロンもまた *D. T.* に拠ってシェイクスピアから決別しようと試みたのであった。

この結果から今や次のような点も導き出せる。一つには、偉大な存在もまた、其の他の存在の網の目の中に存在するのであって、孤高の天才と言うのはありえないとするバイロンの見解である。バイロンは *D. T.* の序文で影響を受けた先行作品—Joshua Pickersgill の *The Three Brothers* を挙げただけでなく、自らの作品と同じようにその影響下に生まれた作品として M. G. Lewis の *Wood Demon* を挙げている。バイロンは作品間の込み入った影響関係に照明を当てて、互いが互いを成長させて行くことを明らかにし認めて、より自由な活動を文人達に可能にしたかったのではないだろうか。これによってバイロンはシェイクスピアから自由になると共に、後代で著作権の存在を認めながらもその期限が切れる時期もあるとする考えに先鞭をつけた。

バイロンがリチャード三世物語に馴染んでいたと類推される痕跡を尋ねると、バイロン19歳の1807年10月26日、トリニティ・カレッジからノッチンガムの隣人エリザベス・ピゴットに宛てた手紙に出会う。近況を報告し、相手からの手紙も要求する長めの手紙であるが、その3分の2辺りのところで、バイロンはその頃の執筆生活を叙している。

I have written 214 pages of a novel, one poem of 380 Lines, to be published (without my name) in a few weeks, with notes, 560 Lines of Bosworth Field, and 250 Lines of another poem in rhyme, besides half a dozen smaller pieces, the poem to be published is a Satire, apropos^⑪ (underlines mine)

この内で one poem of 380 Lines は、後に加筆されて1809年に *English Bards and Scotch Reviewers* として出版された。問題は 560 Lines of Bosworth Field である。これに当たる詩が、バイロンの作品中に見つかっていない。おそらくは若書きとして破棄されたか、後の作品

に発展吸収されて、このタイトル、あるいは似たような題のもとでは発表されなかったであろう。‘Bosworth Field’ と言えば、リチャード三世時の古戦場であって、例えば日本史に置き換えて ‘関が原’ と題して恋愛詩を読むとしたらそれはよほどのことがない限り ‘断り書き’ を必要とする。これと同じように ‘Bosworth Field’ と題してリチャード三世カリッチモンドーヘンリー七世、あるいは天下分け目の合戦を描かないとしたら不思議である。この若書きはどこに行ったのだろうか。大胆な推測をすれば、それは15年待って、*The Deformed Transformed* に生まれ変わったのである。シェイクスピアの多くの作品の典拠はオヴィディウスの『変身譚』であると言われる。そうであるとするなら、バイロンがそのタイトルに ‘transform’ を使って、シェイクスピアに対抗して、あるいは模倣して、シェイクスピアとは一味違った変身物語を企画した事は大いにありえよう。少なくとも、この日誌からはバイロンがリチャード三世に持った若き日の関心は知性や女性ではなく、戦士としてのリチャード三世であり、バイロンは叙事詩を書きたかったことが読み取れる。ロビンソンがナイトのリチャード三世コンプレックス論に対して感じた不満は、戦闘の場面の収まりの悪さが一つであったが、バイロンにとってのリチャード三世はここで見るように戦う勇士である。またロビンソンのもう一つの気懸り、*Don Juan* 最後部の ‘メロウ’ な明るさは、後に分析することになるが、まさにリチャード三世のバイロンの変身の結果と読み解ける。

シェイクスピアをただ否定したり、プロパガンダ劇を理由に史実との差を以ってその虚構を非難すると、バイロン自身のリチャード三世への愛惜の念の存在根拠をなくすことにもなる。シェイクスピアの変形を非難しながらリチャード三世の見事な造形と彼の悪魔的な魅力を受得るには、やはり、もう一度見事な造形をあるいは変形をバイロン自身がしてみせると言うことが必要であり、バイロンのしたかったことではないか。バイロンの作品 *The Deformed Transformed* の内容自体の分析は、今回は紙幅が尽きてしまったので立ち入れないが、この拙論 (その一) での結論としては、バイロンはシェイクスピアが史実からの変容として造形したりリチャード三世を、もう一つの変種として自身造形したかったと言うことである。バイロンの看破したように芸術とはまさにデフォルメーションであるからであり、この作品のタイトルが ‘deform’ によって醸し出される雰囲気では怪しいとすれば、確かに一つには現代的禁忌性の故とも言えるが、もう一つには、読者自らにも変身を促す ‘seductive’ な眼差しがあり、それが次の語 ‘transfer’ に溶け込んでいるからであるとも言えよう。そうとすればこの誘いはロマン派の詩人にとっての面目躍如たるものがあり、「万人は詩人」と語っていることになる。それでは an official objection はどうかと言えば、その可能性を留保したまま、(その二) の分析に移りたいと思う。

註

- ① 以下、現代では一部問題となる表現がありますが、当時の用語と翻訳を基に分析する為、そのままの形で使用しています。
- ② Cochran, Peter. Introduction to *Lord Byron: The Deformed Transformed*. International Byron Society, Nottingham, 10 January 2008. p. 2.
http://www.Internationalbyronsociety.org/pdf_files/deformed_transformed.pdf
- ③ Goethe, Johann Wolfgang. *Faust*. Vol. II, 1832, Trans. Takahashi, Yoshitaka. 新潮社, 1968, first edition, 1990, 40th print.
- ④ Byron's Letters and Journals, Vol. 4. Ed. L. A. Marchand. London: J. Marray. 1975. pp. 48-49
- ⑤ *Letters and Journals of Lord Byron: with Notices of His Life*. 2 vols. Thomas Moore. 1830. Quoted in the introduction to "The Deformed Transformed." *Oxford edition Collection of works of Byron*. 1991.
- ⑥ *Lady Blessington's Conversation of Lord Byron*, Ed. Earnest J. Lovell, New Jersey: Princeton University Press, 1969. pp. 80-1.
- ⑦ Knight はここで *Don Juan* 中の *Richard III*, V, iii ll. 216-220 からの引用を例にあげているが、バイロンが殊に E. Kean によって演じられたシェイクスピア劇を基調イメージに使用していることは研究者の間で知られていることであり、その為にペンギン版の *Don Juan* ではカバー絵に Kean の肖像が使われている。Wolfson, J. Susan & Peter J. Manning. Introduction to Byron. "*Don Juan*". Ed. T. G. Steffan, E. Steffan & W. W. Pratt. London: Penguin Books, 2004. p. vii.
- ⑧ G. Wilson Knight. *Byron and Shakespeare*. London, Routledge, 1966. p. 157.
- ⑨ McGann, Jerome. Notes to "The Deformed Transformed." *Oxford Edition Collection of Works of Byron*. 1991, p. 733
- ⑩ *Byron's Letters and Journals*, Vol. 10. Ed. L. A. Marchand. London: J. Murray, 1980. p. 136
- ⑪ An armchair-detective は実地調査をしないで推理する素人探偵のこと。『時の娘』では探偵は公務執行中に負傷した警官が入院中のベッドで古い資料を読みながら推理する。
- ⑫ Tey, Josephine. *The Daughter of Time*. 1951.
- ⑬ 尾野比左夫『リチャード三世研究』広島、溪水社、1999年
 小谷野敦『リチャード三世は悪人か』東京、NTT 出版、2007年
- ⑭ これは我国で言えば邪馬台国論争のようなもので、様々な分野での知識人から一般民間人に至るまでの好奇心と愛憎、ことに愛郷心を惹き付けた。即ち知識の享受や普及には、伝統の理解と享受者の所属する場所への愛着が重要な役割を占めるということであろう。
- ⑮ Sir George Buck. *History of the Life and Reign of Richard the Third*. first published in 1649.
- ⑯ *The Work of Lord Byron, Letters & Journals*, vol. III. London: John Murray, 1899.
- ⑰ Matthew Gregory Lewis (いわゆる Monk Lewis) は1816年夏ディオグッティ荘にバイロン一行を訪ね、自ら訳したゲーテの『ファウスト』を紹介した。McGann, Jerome. Notes to "The Deformed Transformed." *Oxford Edition Collection of works of Byron*. 1991. p. 730
- ⑱ *Byron's Letters & Journals*. Vol. 5. Ed. Marchand. 1976. p. 206.
- ⑲ *The Work of Lord Byron, Letters & Journals*, Vol. IV, London John Murray, 1900.
- ⑳ Meyers, A. R. Ed., *The History of the Life and Reign of the Richard the Third by George Buck*, EP, 1973 と Kincaid, A. N. Ed., *The History of King Richard the Third by*

Sir George Buck Master of the Revel, Alan Sutton, 1979.

- ②① Walpole, H. *Historic Doubts on the Life and Reign of King Richard the Third*. 1768.
- ②② *Byron's Letters and Journals*, Vol. 4. Ed. L. A. Marchand. London: J. Murray, 1975. p. 50
- ②③ Walpole, H. *Historic Doubts on the Life and Reign of King Richard the Third*. 1768.
- ②④ Shakespeare. *King Richard III*. Act V, scene 3. l. 307.
- ②⑤ Le Sage の *Le Diable Boiteux* (1707) を暗示。
- ②⑥ 宛先が無い為、書簡集の編者 Marchand による推測。
- ②⑦ *Byron's Letters and Journals*, Vol. 4. Ed. Marchand. London: J. Murray, 1975. p. 57
- ②⑧ *Byron op. cit.*, Vol. 4. p. 244
- ②⑨ G. Wilson Knight. *Byron and Shakespeare*. London, Routledge, 1966. p. 155
- ③⑩ Scott, W. *Novels & Tales*. Vol. 5, *Antiquary*, *Rob Roy*. Vol. 6 *Rob Roy*. Edinburgh, 1818, 1819. pp. 427-428, quotation in 尾野比左夫『リチャード三世研究』広島、溪水社、1999. p. 31
- ③⑪ Lytton, E. B, *The Last of the Barons*, Charles Scriber's Sons, Everyman Library, first published 1843. London: BiblioBazaar, 2007.
- ③⑫ James, G. P. R, *The Woodman; A Romance of the Times of Richard III*, London, 1849.
- ③⑬ 尾野比左夫『リチャード三世研究』広島、溪水社、1999年 p. 31.
- ③⑭ 尾野比左夫 *Ibid.* p. 15
- ③⑮ Quotation in Barton "Byron and Shakespeare" 2004, below from Medwin, Thomas, *Conversation of Lord Byron*, Ed. Ernest J. Lovell, Jr. Princeton UP, 1966. p. 140
- ③⑯ Barton, Anne, "Byron and Shakespeare". *The Cambridge Companion to Byron*, Ed. Drummond Bone, Cambridge University Press, 2004. p. 227
- ③⑰ Introduction to William Shakespeare, *King Richard III*. Ed. Baldwin, Pat and Tom Baldwin. Cambridge: Cambridge University Press, 2000. p. 2. & etc.
- ③⑱ *The Two Noble Kinsmen*
- ③⑲ Barton, *ibid.*, p. 227
- ④⑰ *Byron's Letters and Journals*, Vol. 12. Ed. L. A. Marchand. London: J. Murray, 1982. p. 149
- ④⑱ 1813年12月1日、1814年4月30日、1821年6月29日等。
- ④⑲ Barton, *op. cit.*, p. 227
- ④⑳ *Byron's Letters and Journals*, Vol. 2. Ed. L. A. Marchand. London: J. Murray, 1974. p. 213
- ④㉑ *Byron, ibid.*, Vol. 4. Ed. L. A. Marchand. p. 84-5
- ④㉒ *Byron, ibid.*, Vol. 4. Ed. L. A. Marchand. p. 110
- ④㉓ *Byron, ibid.*, Vol. 4. p. 111
- ④㉔ Barton, *ibid.*, p. 226-7
- ④㉕ Barton, *ibid.*, p. 225
- ④㉖ Barton, *ibid.*, p. 233
- ④㉗ Barton, *ibid.*, p. 234
- ④㉘ *Byron's Letters and Journals*, Vol. 1. Ed. L. A. Marchand. London: J. Murray, 1974. p. 136

Bibliography

- Barton, Anne. "Byron and Shakespeare." *The Cambridge Companion to Byron*. Ed. Bone, Drummond. Cambridge: Cambridge University Press, 2004. pp. 224-235
- Barton, Anne. "Don Juan Transformed." *Augustan and Romantic, Byron*. Ed. Rutherford,

- London: Macmillan 1990. pp. 199-220
- Byron, Gorge Gordon. *Byron's Letters and Journals*. Vol. 1~13. Ed. L. A. Marchand. London: J. Murray, 1974~1994.
- Byron, Gorge Gordon. *The Work of Lord Byron, Letters & Journals*. Ed. Rowland E. Prothero Vol. III. London: John Murray, 1899.
- Byron, George Gordon. "Don Juan" *Byron — A Critical Edition of the Major Works*. Ed. McGann, Jerome. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- Byron, George Gordon. *The Deformed Transformed*. Ed Cochran, Peter. 7 July 2007. International Byron Society home page. <<http://www.internationalbyronsociety.org>>
- Byron, George Gordon. "The Deformed Transformed." *Oxford Edition Collection of Works of Byron*. 1991. Oxford: Oxford University Press, reprint 2000.
- Douke, Tadamichi. *Faust and Its Origin and Development*. with a folklore version of Johann Faust Story. 『ファウスト その源流と発展』 付 民話本「ヨハン・ファウスト博士の物語」. Asahi Press. 1974.
- Goethe, Johann Wolfgang. *Faust* (Vol. I). 1808, trans. Takahashi, Yoshitaka. 新潮社, 1967 first edition, 2005, 69th print.
- Goethe, Johann Wolfgang. *Faust* (Vol. II). 1832, trans. Takahashi, Yoshitaka. 新潮社, 1968 first edition, 1990, 40th print.
- Le Sage, Alain-Rene. *Le Diable boiteux*. 1707. trans. Smollet, Tobias Ed. Brack, O, M. and Leslie A. Chilton. Athens and London: The University of Georgia Press, 2005.
- Knight, G. Wilson. *Byron and Shakespeare*. London: Routledge & Kegan Paul, 1966.
- 小谷野敦 『リチャード三世は悪人か』 東京、NTT 出版、2007年
- Oosawa, Takeo. 大澤武男. *Faust and the Infancide*. 『「ファウスト」と嬰兒殺し』. 新潮社. 1999.
- Grabbe, Christian Dietrich. *Don Juan und Faust*. 1827. Trans. Oguri, Hiroshi 小栗浩. 現代思潮社. 1967.
- 尾野比左夫 『リチャード三世研究』 広島、溪水社、1999年
- Oshio, Takashi. *Faust—The Origin of European Human Characters*. 1972. 講談社, 1996.
- Roberts, J. M. "The Making of the European Age," *The Illustrated History of the World*. Ed. Suzuki, Tadashi. Tokyo: Sougennsya, 2003. pp. 69-126
- Robinson, Charles E. "The Devil as Doppelgänger in *The Deformed Transformed*: the Sources and Meaning of Byron's Unfinished Drama." *The Play of Lord Byron Critical Essays*. Ed Gleckner, Robert and Bernard Beatty. Liverpool: Liverpool University Press. 1997. pp. 321-345
- Shakespeare, William. *King Henry IV*. Part 1. Ed. Gibson, Rex. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Shakespeare, William. *King Henry IV*. Part 2. Ed. Gibson, Rex. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- Shakespeare, William. *King Richard II*. Ed. Clamp, Michael. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Shakespeare, William. *King Richard III*. Ed. Baldwin, Pat and Tom Baldwin. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Shakespeare, William. *Richard III*. Ed. Burns, Edward. Devon : Northcote House Publishers

Ltd., 2001.

Shelley, Mary. *Frankenstein*. 1818 & 1831. London: Penguin Books, 1992.

Tey, Josephine. *The Daughter of Time*. 1951. New York: Simon & Schuster Inc., 1995.

Watkins, Daniel P. "The Ideological Dimensions of Byron's *The Deformed Transformed*: the Sources and Meaning of Byron's Unfinished Drama." *The Play of Lord Byron Critical Essays*. Ed Gleckner, Robert and Bernard Beatty. Liverpool: Liverpool University Press. 1997. pp. 347-362

Walpole, H. *Historic Doubts on the Life and Reign of King Richard the Third*. First published 1768. London: Indypublish. Com. 2006.